

# 300年の技を受け継ぐ べっ甲細工職人

古川弘勝さん（長崎・江崎べっ甲店）





長崎のシンボル「眼鏡橋」のすぐ近くにある江崎べっ甲店。店舗そのものも、明治の代表的建築物として、国指定・登録有形文化財に指定されている



観光客でいっぱいの店内



店内から製作工程を見学できる



唐草彫りなど精巧で細かい仕事が続く



平成十四年度障害者雇用促進全国表彰式が、昨年九月十一日、東京国際フォーラム(東京都千代田区)で開催され、優秀勤労障害者・障害者雇用優良事業所等の表彰が行われた。

長崎のべっ甲職人、古川弘勝さん(四一歳)は、優秀勤労障害者の一人として厚生労働大臣表彰を受けた。

古川さんが働く江崎べっ甲店は、べっ甲細工三百年の技を受け継ぐ、日本で最も古いべっ甲専門の老舗だ。江崎べっ甲店の歴史が、我が国におけるべっ甲製作の歴史であるともいわれている。

古川さんは、両下肢に障害をもつて生まれ、三歳まで立ち上がること、歩くこともできなかった。四歳頃、不自由ながらも歩けるようになり、高校まで地元の長崎で学んだ後、あこがれていた寿司職人見習いとして就職した。しかし、立ち仕事が多いため、両下肢にハンディキャップのある古川さんには難しく、一年ほどで寿司職人への道をあきらめ、実家へ戻った。

その後、江崎べっ甲店の木工部で、べっ甲細工を入れるガラスケー



髪留めをつくる古川弘勝さん



江崎べっ甲店の職人たちの伝統的な手作業から生み出された銘品



掘りごたつ式に工夫した作業台



スづくりの名人として働いていた父親の紹介で、一九七九年七月、江崎べっ甲店に入社し、父親の助手としてケースづくりに励んだ。

八年後、職場の勧めと、身体の状態を考え、思いきってべっ甲職人の花形である「彫り師」(べっ甲に彫刻を施す職人)に転身した。一日中ほとんど座ったままの彫り師の仕事は、両下肢に障害がある古川さんに向いていたようだった。

先輩たちの指導を受けながら技術を磨き、一年後、バラのブローチを彫って、家族にプレゼントした(今から思うと三〇点ぐらいの出来)と古川さんは笑う。

現在、彫り師となって十五年。ベテランの域に入ってきた古川さんは「材料それぞれのもつ色・模様など、個々の特色をいかし、お客さんに満足いただけるものをつくり上げた」と彫刻刀に力を込める。

●江崎べっ甲店

〒850-0874  
長崎市魚の町7-13  
TEL 095-821-0328  
FAX 095-827-1178



障害者雇用促進全国表彰式で、優秀勤労障害者として、狩野安厚生労働副大臣（左）から厚生労働大臣表彰を受ける。「身体のこともあって休むことも多かったが、ハンディを理解して面倒をみていただいた。会社の皆さんの支えがあったことです。昨年死去した父も喜んでくれていると思います」と感想を語った



職場の同僚たちから祝福される古川さん（左）



社長夫人の江崎典子第一部長（右）から指示を受ける。「古川くんは手先が器用で熱心です。丁寧すぎると思うほど」と話す